


学 位 論 文 の 要 旨

専攻名	環境工学専攻	ふりがな氏名	ゆあさ ひろき 湯浅 裕樹	
学位論文題目	平面構成の変容と住生活分析に基づく現代日本住宅の研究 (The requirement of residents for planning of detached house in Japan)			
<p>戦後の住宅難から復興したわが国は、1970年代までに国民全体に中流階級意識が定着し、その後、少品種大量生産の時代から個性化・多様化の時代に突入したとされるのが1980年代であったといえる。本研究は、この当時から現在に至るまでの約30年間で、住宅の平面構成や住生活がどのように変容を遂げているのか、あるいは従来からの伝統性がどの程度継承されているのか、これらの住要求構造を明らかにすることを目的としている。</p> <p>本論文は、序章と終章を含む全6章で構成される。</p> <p>序章では、わが国の住様式の近代化における平面構成の発展過程を接客領域と家族生活領域の関係性から2つの流れを概括した。ひとつは、専門家(建築家)が介入せず、住まい手自らが住生活の矛盾を克服して発展させた「中廊下型住宅」形成の過程である。いまひとつは、封建的家父長制に基づく接客本位から家族本位への転換を意図して、専門家によって提案された「居間中心型住宅」形成の過程である。</p> <p>まず、第1章では、近代日本住宅のその後の動向として、3期にわたり(1980年・2000年・2008年)収集された全都道府県のデータ20,655件を用いて平面構成の変容をとらえた。</p> <p>分譲独立住宅の平面構成は、室構成1階2室・2階3室に画一化しており、伝統性を保持する和室(タタミ室)は縮小化し、居間との接続形式は連続化志向であるなど(居間と和室が続き間である平面構成の経時変化:1980年調査:25.5%、2000年調査:59.5%、2008年調査:61.4%)、着実に標準化が進行している。一方、内部動線の変化からは、これまで圧倒的な割合を占めていた「中廊下型住宅」は、現在においても依然として支配的ではあるが、それまで極めて少数であった「居間中心型住宅」が急増している(2000年調査:5.1%、2008年調査:24.5%)という近年の変化も指摘した。</p> <p>つづいて、第2章では、2007年から2013年にかけて戸別訪問によりえた住まい方に関するデータ511件を基に、居住者の生活実態と住要求をとらえた。そこから指摘されることは、先の供給実態と生活実態には大幅な乖離が認められることであり、和室の居間との連続化・縮小化志向である住宅供給とは反対に、居住者の和室に対する住要求は、居間からの分離、あるいは拡大(続き間座敷)志向であった。さらに、和室の希望用途の分析では、その乖離が顕著であり、依然として、ことに、子の成長段階に応じて和室へ求める用途が接客専用として希望する傾向を示した。</p>				

(注) 和文 2,000 字又は英文 800 語以内

続紙 有 無

さらに、第3章では、和室のしつらえ（起居様式や床の間の装飾性）や用途（就寢室のとられ方）の分析から、合理性や機能論だけでは理解されないわが国の住宅のあり方を現代的に再考した。近代化以降、とりわけ戦後において、起居様式のユカ坐からイス坐への移行、個室の確保、家父長制から家族中心主義への転換などの理念を根拠として追求してきた住宅建築に対して、わが国では室機能の転用性を基軸として自由度の極めて高い住生活を継承しており、和室がこれを保障していることを示した。

第4章では、全都道府県別の比較分析から現代日本住宅の地域性について言及した。

住宅供給における平面構成の変容は、概して、全国的に共通の方向性を示しており、地域性は希薄化している。しかしながら、地域によって部分的に平面構成の構成比の差異はあり、住生活に基づく分析においても、ことに和室の要否で言うならば、北海道と沖縄県では全国と異なる志向性を指摘することができ、和室を不要とする1階1室型を求める傾向にある北海道に対して、沖縄県は、和室を不要とする層は極めて少なく、和室温存志向であるなど、一部に地域性を認めることもできる。また、建築環境工学的観点から住宅の室内温熱環境シミュレーションにより吹抜けのある居間空間の数値的な評価を示した。

最後に終章において、これからの住宅建築の計画課題について言及した。

本論文で示した分析結果を総括すると、「居間中心型」は、これからの住宅の主要な平面構成のひとつとして定着し、家族の共用空間（＝居間）の拡充は今後も進んでいくであろうと考えられる。しかしながら、住宅供給の平面構成の変容は、必ずしも居住者の住要求をそのまま反映したものであると単純にとらえることはできず、むしろ、現在普及されている平面構成と住生活には大幅な乖離が認められる。その発展的な計画あるいは代償としての、居間に対する和室の従属化（あるいは補助空間化）や和室の非設置化は、顕著に否定的な評価であった。その要因として考えられるのは、①居間と和室の連続性は、必ずしも融通性が高いとはいえず、むしろ性格が曖昧になっているのではないかと、②和室の持つ自由度は就寢室の流動性や接客などの対社会性を温存するうえで、依然として有効に働いているということである。これらの住戸内生活全般を視野に入れながら家族の共用空間の拡充を図る必要があると結論づけている。

（以上 1,981 字）

学位論文審査結果の要旨

専攻	環境工学 専攻	氏名	湯浅 裕樹
論文題目	平面構成の変容と住生活分析に基づく現代日本住宅の研究		
主査	鈴木 義弘		
審査委員	佐藤 誠治		
審査委員	井上 正文		
審査委員	小林 祐司		
審査委員			
審査結果の要旨 (1000字以内)			
<p>本論文は、少品種大量生産の時代から多様化の時代に入ったとされる1980年代から現在までの約30年間で3期に分けて採取された膨大な住宅平面のデータと全国的な訪問調査により居住者の住まい方や選好をとらえ、この間の住宅平面構成や住生活がどのように変容を遂げているかを多面的に解明している。</p> <p>序章においては、研究の背景、既往研究における到達点と課題、および、研究の目的と方法について述べている。</p> <p>1章では、分譲独立住宅平面を経時的に比較すると、室数構成の上ではおしなべて1階2室・2階3室に画一化しており、和室(タタミ室)は縮小してリビング(居間)との連続化傾向にあるなど、多様化とは対極的に標準化が進行していること、その一方で、かつては支配的であった中廊下型に代わり居間中心型が急増しているという近年の特徴も明らかにされており、総じて家族共用空間拡充志向にあることが指摘されている。</p> <p>つづく2章は、前章での住宅供給実態に対して、居住者の住宅平面への選好をとらえている。これによると、和室はリビングとは分離・拡大志向が顕著であり、すなわち住宅供給実態と居住者の住要求には大きな乖離があること、また生活実態とは逆に和室での接客希望がライフステージの進行に伴って強く表れることなど、潜在的な側面に踏み込んだ分析がなされている。</p> <p>3章では、伝統的な和室という住様式に着目して、室機能の転用性が住生活の自由度を高めており、合理性や機能論だけでは理解できないわが国の住宅のあり方が現代的に再考されている。</p> <p>さらに4章では、標準化の進行のなかに見いだすことのできる地域的な特徴についての分析によって、一部には風土性・都市性の影響を残しながらも、時代の経過とともにこれらの差異は希薄化しており、現在に至る住宅平面構成の変容は基本的には全国的な傾向であると判断できることが検証されている。</p> <p>これらが終章において総括されている。</p> <p>以上のように、本論文は住宅平面構成の変容と潜在的住要求の解明という重要な課題に取り組んだ意欲的かつ発展の可能性を含んだ内容として高く評価でき、これからの住宅計画を構想する上での示唆に富むものでもある。</p> <p>論文公聴会において、研究内容に関する簡明な説明があり、質疑応答でも的確な回答がなされた。また、最終試験も優秀な成績であり、審査委員会では全員一致して本論文は博士(工学)の学位に相当すると判定した。</p>			